

## 12年前のジョン・ピルジャーによってマンチェスター・テ

### ロを読む (原題 : Truth Struggling)

【訳者注】2005年7月7日、ロンドンの地下鉄で大規模な爆弾テロが起こった。その時に書かれた世界的に有名なジャーナリストの一人、ジョン・ピルジャーの評論によって、先日(5/22)のマンチェスター爆弾テロを的確に理解できると考えて、Information Clearing House がこれを再録した。これは、先日の事件を12年前のテロの延長として考えた方が理解しやすくなるということである。今回もISISが犯行を名乗っていて、主犯の名前も分かっているという。

前回の記事のFBIインサイダーによると、NWOは、表面上はISISやアルカーイダと戦うが、「同時に彼らを生かしておかなければならない。」なぜなら、「もし(テロをやってくれる)ISISが根絶されれば、CIAやDODの予算が減り、イスラエルの受け取る支援が減り、シリアを通るパイプラインの計画が頓挫し、シリアやロシアを倒す計画も頓挫する。したがって、このような大胆で恐ろしい陰謀を、たえず人民にあてがっておかねばならない。」(<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170522.pdf>) テロリストの側から見れば、とうてい、こんな復讐で済まされるような問題ではないが、その復讐は自分たちの怨敵にやらせてもらっている。

John Pilger

June 21, 2005 “ZMag” <http://www.zmag.org/sustainers/content/2005-07/21pilger.cfm>



ロンドンの爆弾テロの報道全体の中で、一片の真実が何とか聞いてもらえた。立派な例外はあるが、報道では、真実は用心深く、弁解するように口にされる。時には、大衆の一人が沈黙を破る時がある。それは東ロンドンの人が、CNNのカメラ班とリポーターの前までつかつか歩いて行ったときだった。「イラクだよ！」と彼は言った。

「我々はイラクを侵略した。何が返ってくると思ったんだ？ おい、それを言えよ。」

スコットランドの議員 **Alex Salmond** は、それを BBC テレビで言おうとした。すると彼は「犠牲者の埋葬も済まないというのに、品を弁えないことを言う」といわれた。英リスペクト党の **George Galloway** は、BBC のテレビ主宰者から、それを言うとは「無骨だ」といわれた。ロンドン市長 **Ken Livingstone** は、彼が前に言ったこと——イラク侵略は我々の街路にやってくるだろう——の正反対を言った。ギャロウェイという例外を除いて、いわゆる反戦議員の誰一人として、明瞭にずばりものを言う者はいなかった。戦争売りつけ屋どもが、公開討論の限界を定めることを許されていた。ガーディアン紙のもっと愚か者の一人は、ブレア首相を「世界の指導的政治家」と呼んだ。

にもかかわらず、CNN を邪魔した人のように、人々はこれが起こった理由を理解し、知っている。それは、イギリス人の大多数が戦争に反対で、ブレアがウソつきだと考えているからである。これはイギリスの政治的エリートには恐ろしいことだ。私が出席した大きなメディア関係のパーティで、重要なゲストの多くは、“イラク” とか “ブレア” という名を、職業的・公的には言えないことの、一種のカタルシス（ガス抜き）として発していた。

7月7日の爆弾はブレアの爆弾だった。

ブレアが、中東での彼とブッシュの、不法な、挑発によらない、血染めの冒険を、自国にまで引き寄せたのである。もし彼の歴史的な無責任がなかったら、ロンドン地下鉄と 30 番バスで死んだ人々は、確実に現在、生きているだろう。これこそ、リビングストーン市長が言うべきことだった。侵略の前夜にブレアに対して突きつけられた、唯一の挑戦的質問をわかり易く言うならば、この男が首相として不適任なのが、いま完全に明らかになった、ということだった。

これ以上のどんな証拠が要するというのか？ 侵略前にブレアは、合同情報委員会から、この国への「間違いなく最大のテロの脅威が、イラクへの軍事行動によって生ずるだろう」と警告されていた。2003年2月の YouGov 調査によれば、ロンドン子の 79 パーセントが、イギリスがイラクを攻撃すれば、「ロンドンへのテロ攻撃の確率がもっと高くなる」と警告していた。一か月前にリークされた極秘の CIA 報告は、この侵略はイラクをテロリズムの中心地に変えてしまったと言っている。CIA によると、この侵略前には、イラクは「その近隣諸国にテロの脅威を輸出していなかった。」なぜなら、サダム・フセインは「頑強にアルカーイダと敵対していたからだ。」

ところで、英国体制に深く食い込んだシンクタンクである、チャタム・ハウス研究所の7月

18日の報告が、ブレアの安楽死を求めているのは当然である。それは、イラク侵略が「アルカーイダのプロパガンダや、募兵や募金ネットワークに勢いを与えた」ことは「全く疑いのない」ことで、一方、我々はテロリストに理想的な標的を与え、その練習場になっている、と言っている。「強力な同盟国に相乗りしたこと」が、イラク人、アメリカ人、イギリス人の命を失わせた。右翼の学者で西側諸国の声である Paul Wilkinson が主となって、これを書いている。行間を読むならば、首相が深刻な責任者であると言っていることがわかる。この国を運営している者たちは、彼が大罪を犯したことを知っている。この“リンク”は確立したものとなった。

ブレアの決まった反論は、この侵略のずっと前からテロはあった、特に9・11がそうだ、というものである。中東の苦痛の歴史を理解している者なら、9・11にも、マドリッドやロンドンの爆弾にも、驚かないだろう。ただ、それ以前にそれらが起こらなかったのはなぜなのか。私はこの地域のことを35年間、報告しており、何百万ものアラブやムスリムの人々がどう感じているかを、ひと言で表現するとしたら、それは“屈辱”だと言うだろう。エジプトが1973年のイスラエルとの戦争で、その奪われた領土を取り戻せそうに見えたとき、私はカイロの喜びに沸く群衆の中を歩いた。あたかも歴史の屈辱の重しが取れたような感じだった。あるきわめてエジプト流の喜び方で、ある人が私に言った——「我々はかつてイギリスのクラブで、クリケットのボール拾いをしていた。今、我々は自由になった。」

彼らはもちろん自由ではなかった。アメリカがイスラエル軍を立て直し、彼らは再びほとんど全部を失った。パレスチナでは、捕らわれの人々に屈辱を与えることが、イスラエルの政策である。どれだけのパレスチナの赤ん坊が、母親が早産のために出血しながら泣き叫び、向こうに病院の光が見えていながら、軍の検問所の道路わきでお産をすることを強いられたために、死んだことだろうか？ どれだけの老人が、若いイスラエルの新兵に服従を強いられたことか？ いかにも多くの家族が、アメリカの供給したF-16機によってふっ飛ばされたか？ あるBBCのコメンテーターが言った——ロンドン爆弾テロの深刻さは、「イギリスで、それ以前に自爆テロがなかったことからわかる。」イラクはどうか？ イラクでは、ブレアとブッシュが侵略するまで、自爆テロはなかった。パレスチナは？ そこでは、ブッシュとブレアに援助された戦争犯罪人エアリエル・シャロンが権力につくまで、自爆テロリストはいなかった。1991年の湾岸“戦争”では、米・英軍が、20万人以上のイラク人を死傷させ、国連によれば、その国家のインフラを「終末状態に」してしまった。それに続く、米・英政府の狂信者たちの企み、推進した輸入禁止は、中世の城攻めのような感じだった。餓死強制同然の食糧配給を担当させられた国連職員 Denis Halliday は、これを「民族抹殺的」と呼んだ。

私はその結果を目撃した——使用済みウランに汚染された広大な南イラク地帯、爆発を待

っているクラスター爆弾。また死んでいく子供を見ていた——ユニセフが輸入禁止によるものと言い、米國務長官マデリン・オールブライトが「それだけの価値があった」と言った、50万の子供の死の一部だった。西洋では、これはほとんど報道されなかった。ムスリム世界を通じて、この悲惨は実体として存在するようであり、その感染力は、多くの若いイギリス生まれのムスリムに届いている。

2001年、ツインタワーで3,000人の人々が殺されたことへの復讐として、2万人以上のムスリムが、アングロ-アメリカのアフガニスタン侵略で死んだ。このことは Jonathan Steele によって、ロンドン・ガーディアン紙に暴露されたが、私の知る限り、ニュースにはならなかった。イラク攻撃は“ルビコン渡河”であり、マドリッドへの報復やロンドン爆破は完全に予言できた。後者は、「イラクとアフガニスタンにおいて、イギリスによって行われた虐殺に報復するもの」と、ヨーロッパの“エルカーイダのための組織”と呼ばれるグループが宣言した。この宣言が本物であろうとなかろうと、この理由は本物であった。ブッシュとブレアは“テロへの戦い”を求めた。そして願いが叶った。公的な議論から外されていることは、彼らの国家テロが、アルカーイダのテロを、比較にならない見せ物にしてしまうことである。10万以上のイラク人の男女や子供が、これまでに殺された——自爆テロによってでなく、アングロ-アメリカ軍によって。「イラクより」と題する詩で、Michael Rosen はこう書いた——「我々は見つからない者たち／我々は数えられない者たち／あなたは我々の作った家が見えない／我々は小さな文字でも、括弧の中のテンでもない／…なぜなら、我々はあなた方から遠く離れて生活したから／なぜなら、あなた方のカメラは別の方向を向いているから…」

しばらく、自分がイラクの都市ファルージャにいと想像してみよう。そこはアメリカの警察国家で、広大な、囲われたゲットーのようなものだ。昨年4月以来、その病院は刑務所というアメリカの政策に利用されている。そのスタッフは米海兵隊に攻撃され、医師たちは射殺され、緊急医薬品はブロックされている。子供たちは家族の目の前で殺された。そこで今、同じ状況が、爆弾の犠牲者を収容したロンドンの病院に強要されたと想像してみよう。ブレアがよくやるヤラセの“記者会見”で、「我々の価値が彼らの価値より先まで生きる」ことについて、カメラ用に感情を偽って見せるとき、いつかこの比較を試みる人があるだろうか？ 沈黙はジャーナリズムではない。ファルージャでは、人々は「我々の価値」をあまりにもよく知っている。

“イスラムの魂はどこへ行ったか”などと嘆いてみせるのも、注意をそらすもう一つの試みである。キリスト教は産業的殺し屋として、イスラムを死んだものとしている。現在のテロリズムの原因は、宗教でも、“我々の生き方”への憎しみでもない。それは政治的なもので、政治的解決を要求している。それは不正であり、ダブル・スタンダードであって、最も深い

恨みを植え付ける。それと、我々の指導者の犯罪性と、「別の方向をむいているカメラ」がその核心にある。

7月19日、BBCのお偉方たちが「テレジョン・センター」で年次総会を開いていたとき、イギリスのドキュメンタリー映画製作者の活気あるグループが、その正門の外側に集まり、テレビでは見ることのない、一連のニュース報道を行った。俳優たちが、有名なリポーターが“カメラピース”をやっているところを演じた。彼らが報道した“物語”には、イラクの一般市民への攻撃、イラクへの“ニュルンベルグ原則”の適用、アメリカによるイラク法の不法な書き換え、および私有化による資源の窃取、通常の人々の日常的な拷問と屈辱的扱い、それにイラクの建築的・文化的な遺産の保護放棄などがあった。

ブレアは、ロンドンの爆弾テロを利用して、アメリカのブッシュがやったように、我々と他の人々の権利をさらに剥奪しようとしている。彼らの目標は安全保障でなく、コントロール強化である。イラク、アフガニスタン、パレスチナや他の場所での、彼らの犠牲者の記憶は、我々の怒りを新たにすることを要求している——。軍隊を外国の地から引き揚げよ。それこそが、7月7日のロンドンで不必要な死を遂げ、被害を受けた人々に対し、我々の負う責任である。それこそが、もしこの滑稽劇が続くなら、命を狙われる人々に、我々が負う責任である。

——以上